

『エリック・サティの生涯と芸術』

伊藤美由紀（3600文字）

今年没後 90 年を迎えるエリック・サティ（1866-1925）について、彼の生涯、作品を振り返りながら、サティらしさ、魅力について考えてみたい。同時代の音楽家達からは、変わり者とみなされていたものの、実際は、時代の先駆けでもあり、単純な和音の繰り返しは、後のスティーブ・ライヒらのミニマル・ミュージックに、《家具の音楽》などの作品で試みたコンセプトは、ジョン・ケージのアイデアや、BGM に繋がる。彼の人物像を想像しながら、彼の音楽観を探りたい。

海運業を営み、音楽好きな父親と、スコットランド人の母親の長男として、フランス北部に位置するオンフルールに生まれる。6 歳の時に母親が病死後、祖父母に預けられる。その後、12 歳の時に祖母が亡くなり、パリに住む父親のもとで暮らす事になる。父親は音楽出版社を始めており、彼の初期の作品は、父親の出版社から出版されている。サティ本人による著作物、覚書は、数々残されているものの、家族に関する思い出などの記述は見当たらない。悲しい思い出が多かったのかもしれない。子供時代の音楽教育に関しては、父の再婚者がピアノ教師で、彼女からピアノを習い、13 歳でパリ音楽院に入学する。しかし、授業は退屈で、と書き残しているように、相性があわなかったようであり、21 歳で退学する。既に 10 代までの彼の人生は、波乱に満ちており、その後の生き様に大きく影響したであろう。彼の突飛な行動は、過去の経験により、自分を外部から守るためにバリアを張るための行為ではないだろうか。

その後、サティは、家族からも離れて、酒場「黒猫」や「旅籠屋・釘」でピアニストをしながら、作曲家として孤立する。その頃作曲された 20 代の作品：ピアノの為の《3つのサラバンド》(1887)、《4つのオジーヴ》(1888)、《3つのジムノペディ》(1888)、《グノシエンヌ》(1889-1897)を見てみる。

2 拍目と 3 拍目が結合されたリズム構成の舞曲であるサラバンドの形式を利用した《3つのサラバンド》は、当時めずらしい、不協和音、解決されない 9 の和音、和声で禁則とされている平行 5 度、平行 8 度などを使用した作品で、ドビュッシーの《ピアノのために》の《サラバンド》に影響を与えたとも言われている。1 曲目は、変イ長調で記譜されているものの、臨時記号が多用されており調性は曖昧になっている。4 曲の短い小品からなる《オジーヴ》は、小節線無

しで1作品4段ずつのフレーズで記譜されている。4作品とも、1段目のテーマが音域を変えて4回繰り返される。1回目は両手とも単音、2、4回目は両手で3和音、3回目は4和音による和音の静的な動きのモノディー形式で、教会のパイプオルガンのような厳粛な響きを奏でる。作曲当時、ノートルダム寺院で何時間も瞑想し、国立図書館でゴシック芸術に関する文献を熟読し、グレゴリオ聖歌、ゴシック建築に関心を寄せていた事もあり、その影響を受けている作品である。「オジーヴ」とは、ゴシック時代の建築の特色で、尖った湾曲する形態を意味する。《3つのジムノペディ》は、彼の作品の中で一番知名度の高い作品だろう。題名は、古代スパルタのジムノペディアという祭典から、その踊りをさす。前出2作品と同様に静的な和声の響きによる催眠的な繰り返しは、後のミニマル・ミュージックにも繋がる。その響きに素朴な旋律をのせた作品である。

「ゆっくり苦しげに」「ゆっくり悲しげに」「ゆっくり厳かに」という、彼らしい皮肉っぽい副題がつけられている。この作品に感銘を受けたドビュッシーは、1と3番の2作品を管弦楽に編曲している。《グノシェンヌ》は全6曲あり、1890年に書かれた最初の3曲に、その前後に書かれた3曲が加わっている。23歳のときに開催されたパリ万国博覧会で、民族舞踏合唱団のルーマニア音楽を聴き、影響を受けて作曲されている。題名は、「知る」というギリシャ語の動詞、あるいは、古代クレタ島にあったグノーソスからの、彼による造語である。ギリシャ語韻律のリズムや、ギリシャ旋法、前打音の使用により東洋的な響きを展開している。譜面では、4拍子の拍節をもっているものの小節線は使用せず、音楽用語ではなく、比喩的な彼の独特な言葉が記述されている。奏者に考えさせるような、自由さを促すようなこのような記譜は、後の図形楽譜へも繋がるであろう。

ドビュッシー(1862-1918)との友情について、取り上げてみる。年齢は近いが、ドビュッシーがローマ賞受賞者として成功への道を上りつめて裕福な生活を実現したのに対して、サティは、音大を中退し、困窮生活に立たされ、なかなか世の中に受け入れられない孤立した存在であった。20代半ばに芸術家の集まる酒場で出会って以来、お互いを批判しながらも、お互いの才能に一目置いていたことは明白であろう。ドビュッシーは、サティのピアノ曲《ジムノペディ》を管弦楽に編曲しており、サティは、《4つのささやかな歌》(1920)の1曲目《悲歌》を、ドビュッシーの追悼に捧げている。ドビュッシーに形式が欠けていると批判されて、フランス語で「まぬけ、だまされやすい人」という意味をもつ

「梨」にかけた皮肉な題名のピアノの為の《梨の形をした3つの小曲》(1903)も書いている。実際は、3小品の前に、「始める為に」「同様な延長」、3小品の後に「もう一度」「意味のない繰り返し」の副題をもつ4曲とあわせた全7曲構成であり、彼のユーモア、皮肉っぽさを含んだ作品である。《パレード》初演のスキャンダルのもと、サティの作品によるコンサートが開催された頃には、ドビュッシーの病状は悪化し、外に出られる状態ではなかった。ドビュッシーが、彼のコンサートの成功を信じられないという疑いをもったことを知ったサティは、ひどく傷ついたというエピソードが残っている。結局、誤解は解けずに友情は壊れたまま終わってしまったのであるが、最後までお互い気になるライバルとしての存在であったのであろう。

30代に入り、モンマルトルからパリの郊外アルクイユに引っ越し、毎日、歩いてパリの酒場までシャンソン歌手のピアノ伴奏に通う。亡くなるまでそこで貧乏な生活を送る。いつもグレーのビロードの服を着て身だしなみはきちんとしていたが、部屋は荒れ放題で、物を捨てない貧乏生活であったようだ。その時代、数々の歌曲が生まれ、その中にはワルツのリズムによる有名な《おまえが欲しい》も含まれる。39歳には、ヴァンサン・ダンディがパリ音楽院に対抗して設立したスコラ・カントルムに音楽修行のやり直しを希望して入学し、対位法を極め、3年後に最優秀な成績で卒業する。

40代の作品として、ユニークな題名をもつ《4つの犬のためのぶよぶよした前奏曲》(1912)、前作が出版社から拒否されたことへの皮肉をこめた《3つの犬のための本当にぶよぶよした前奏曲》(1912)、《ひからびた胎児》(1913)、《スポーツと気晴らし》(1914)のピアノソロ作品を紹介する。「ぶよぶよ」というのは、ドビュッシーへの垂流の作曲家への皮肉をこめた彼の言葉であり、作品は、無駄のない構成で力強く完成されている。《ひからびた胎児》は、「ナマコの胎児」「甲殻類の胎児」「柄眼類の胎児」の副題をもつ3つの小品からなる。楽譜の随所に説明が表記されており、サティらしいユニークな指示もある。2曲目は、ショパンの有名な葬送行進曲のパロディであるが、「シューベルトの有名なマズルカからの引用で」と説明されているのも、わざと奏者を惑わす彼のユーモアなのか。1、3曲目は、何かを暗示しているかのように、曲の最後に完全和音が10回以上執拗に連打される。《スポーツと気晴らし》は、シャルル・マルタンの画に音楽小品をつけるという出版社の企画である。依頼したストラヴィンスキーが要求した委嘱料が高すぎたので、サティに交渉された。「貧乏が芸術家にとつ

ての理想である」と考えていたサティは、提示金額が高すぎると、引き下げるのに苦労したそうだ。円熟した 21 の小品からなる。

次なる転機は、詩人コクトー(1891-1963)との出会いであろう。49 歳の時の出会いにより、1 幕のバレエ作品《パレード》が生まれる。台本：コクトー、舞台・衣装：ピカソ、出演：ディアギレフ率いるロシアバレエ団による初演は、パリ音楽界に衝撃を与えスキャンダルとなるものの、その後の彼のキャリアは進展する。音楽には、サイレン、タイプライター、ピストルなどの騒音、環境音が使用され、ピカソの衣装は、キュビズム風の奇抜なデザインであった。50 代の晩年には、プラトンの『対話篇』をテキストにした朗読風の 4 人のソプラノと室内楽の為の交響ドラマ《ソクラテス》(1920)、「音楽に耳を傾けないように」との聴衆への注意書きのある聴く事を目的としない《家具の音楽》(1920)、彼の最後の作品となるバレエ《本日休演》(1924)の話題作を生み出す。

強い信念をもった彼の志は、周りに振り回されずに、生活、音楽において根ざされ、こつこつと努力しながら自分のルールに基づいた新たな独自の音楽語法を生み出した。